令和３年度「東国文化自由研究」

上州人の災害復興

逆境を乗り越えてきたたくましき先人たち

伊勢崎市立第三中学校
１年２組
小　林　茉　奈

１．はじめに

新型コロナウイルスのパンデミックにより一年延期で開催された今年の東京オリンピック・パラリンピック。無観客による実施は、五輪の歴史の中でも特別なこととして、人々の記憶に残ると思う。特に日本人選手の活躍がとても素晴らしく、コロナ渦で沈んでいた人々を大いに勇気づけてくれた。政府は元々「復興五輪」を掲げてきたが、東日本大震災だけでなく、パンデミックからの復興に向けて、この五輪が歴史の転換点になってくれることを世界中の人々が願ったのではないかと思う。

東日本大震災（2011 年３月 11 日）というと、私は幼かったことと父の仕事の関係で海外に住んでいたこともあり、直接的な記憶はない。しかし、映像を何度も見たりしながら、恐ろしいイメージが頭の中に出来上がっていった。そして、震災から７年後に被災地である福島県や宮城県を訪れ、特に海岸沿いの集落が津波で流されてしまった様子を目にして、とても心が痛んだのを覚えている。それと同時に、新たな街の建設が所々で行われていて、人々のたくましさも感じた。

被災地の様子（石巻市 2018 年３月撮影）

『上毛かるた』取り札「あ」

このようにして、災害と復興を繰り返しながら、人類は進化してきたのだろう。私の住む群馬県は比較的災害の少ない所だと言われている。しかし、群馬県民が子どものころから親しんでいる『上毛かるた』は、最初の取り札「あ」からして、江戸時代の火山災害の内容になっている。人々は災害にどのように立ち向かい、克服してきたのか、興味が湧いてきた。世界や日本にはさまざまな事例があるが、まずは身近な地域である上州（群馬の古称で他にも上毛野、上野、上毛などとも呼ばれた）を中心に調べてみることにした。この調査により、災害と向き合うことの意味を考え直してみたい。

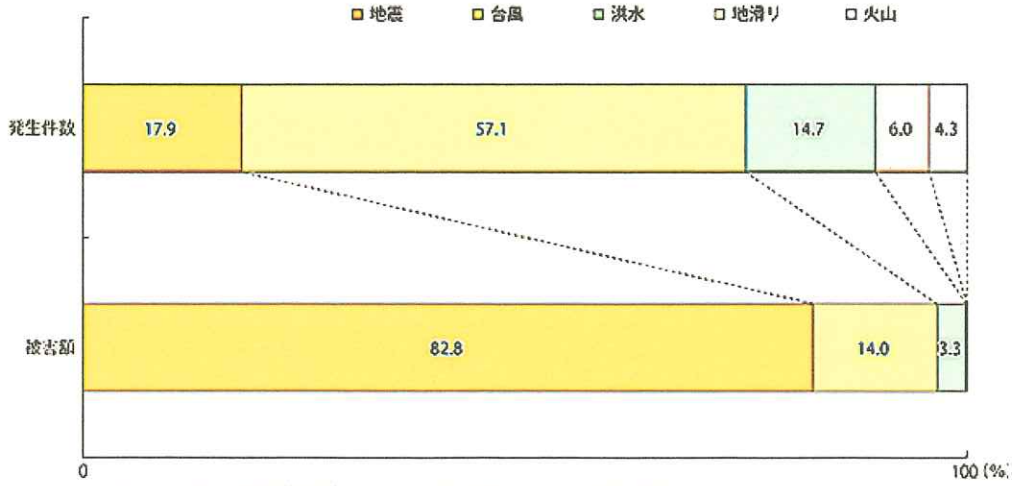
２．災害という視点から見た現在の群馬

日本は国土面積で世界の 0.28%、人口比率で 1.9%しか占めていない。しかし、日本には 110 の活火山（世界の約７%）が存在し、マグニチュード６以上の大きな地震の発生回数は世界の約２割を占める。さらに、台風、洪水などによる気象災害の件数も世界の１割を占めるなど、とてつもなく災害の多い国だ。東日本大震災の被害状況を反映させた平成 26 年版「防災白書」によると、1984 年から 2013 年までの日本の災害死者数は世界の 1.5%と人口比率と比べても少ない水準になっている。一方で、災害被害額は世界の 17.5%で地震発生回数と同様の高い数値を示している。世界と比べて、大きな被害を出しながらも人命はしっかり守られていることが分かる。また、２０１９年版「中小企業白書」によると、災害被害額が最も多いのが地震で、次いで台風、洪水で、火山による被害額は少ないことが分かる。

出典：CRED 1984-2013年の合計。EM-DAT：The OFDA/CRED International Disaster Database – www.emdat.be Université Catholique de Louvain, Brussels（Belgium）の資料をもとに内閣府作成。

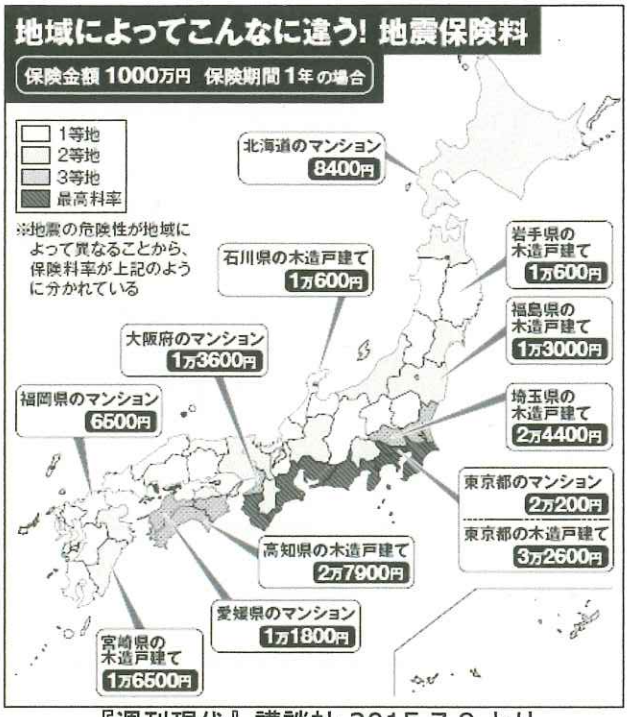
平成２６年版「防災白書」より

第3-2-3図　我が国における自然災害の発生件数及び被害額の災害別割合



資料：ルーバン・カトリック大学疫学研究所災害データベース（EM-DAT）より中小企業庁作成
(注) 1. 1985年～2018年の自然災害による被害額を集計している。
2. 2018年12月時点でのデータを用いて集計している。
3. EM-DATでは「死者が10人以上」、「被災者が100人以上」、「緊急事態宣言の発令」、「国際救援の要請」のいずれかに該当する事象を「災害」として公表している。

２０１９年版「中小企業白書」より



『週刊現代』講談社.2015.7.8 より

その中で、群馬県にはどのような特徴が見られるか。まず、地震についてだが、損害保険料率算出機構が定めた地震保険基準料率を見ると、群馬県は４段階の中で最も地震リスクの低い１等地になっており、その分地震保険料が安くなっている。同じ関東地方でも、太平洋側の千葉県、東京都、神奈川県と比べると大きな違いが見られる。では、その他の自然災害はどうか。令和２年版「防災白書」の附属資料９には、平成７年の阪神・淡路大震災から令和元年までの主な自然災害が報告されている。その中で、群馬県に直接大きな被害をもたらしたものは、北日本から関東甲信越にかけての大雪（全国で死者・行方不明者９５人、住家全壊２８棟、前橋の積雪７３ｃｍ、平成 25 年 11 月~26 年３月）と草津白根山の噴火(死者・行方不明者１人、平成 30 年１月 23 日)の２件で、他県と比べて被害が非常に少ないことが分かる。では、群馬は常に災害という視点から安全な地だったのだろうか。

３．身近にあった災害復興の跡

①　女堀との出会い

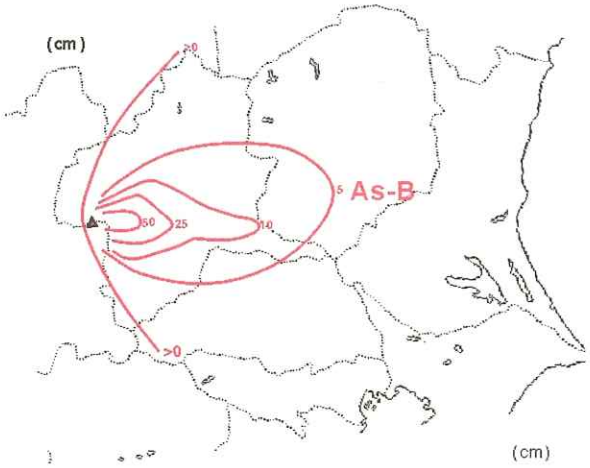
赤堀花しょうぶ園（2016 年６月撮影）

私の家の近くに波志江沼環境ふれあい公園があり、小さい頃からよく遊びに行った。波志江沼には上沼と下沼の２つの沼があり、上沼の北側には赤堀花しょうぶ園がつながっていて、この自然豊かな地域をサイクリングコースとしてよく利用している。赤堀花しょうぶ園は、約 25,000 株の花しょうぶが見頃を迎える６月になると、毎年多くの人々で賑わう。花しょうぶは開花期に畑に水を溜めるため、写真のよう

に低い土地に植えられることが多い。赤堀花しょうぶ園は 12 世紀初頭の農業用水路、つまり女堀（1983 年国指定史跡）を活用してつくられていて、歴史的にもとても重要な場所なのだ。

② 女堀とは何か

女堀は前橋市上泉町から前橋市東部の荒口町、二之宮町、伊勢崎市北部の赤堀町、東町に及ぶ全長 13ｋｍ、幅 15mから 30m、深さ３ｍから４ｍの長大な用水路だが、未完で使用された形跡はない。1108 年の浅間の噴火（天仁噴火）によるテフラ（火山から放出された物質）の関係から、12 世期初頭に開削されたと考えられている。図中の As-B はこの時にテフラが飛散した範囲を示していて、女堀の地域では 10ｃｍ程度堆積したことが分かる。赤城山南麓は火山災害によって水を溜めにくくなり、水田利用に適さなくなってしまった。そのため、この地域に水を補給しようとして用水路が掘られたのではないかと考えられている[i]。



地質調査総合センターHP「1108 年噴火、町田・新井 2003、新編火山灰アトラスより」

1108 年というと、都では白河上皇が院政を行なっていたころで、権中納言藤原宗忠の日記『中右記』に、京都で東方の空が甚だしく赤くなったことなどが記録されている。上野国で発生したこの事件が京都に伝わるのに 1 か月半もかかったようで、上野国の混乱ぶりがうかがえる[ii]。女堀の開削を行なったのは藤原秀郷の子孫である淵名氏（藤性足利氏）であると考えられているが、史料が乏しいため、なぜ未完に終わったのかなど、謎に包まれていることが多い。

③ 女堀の謎にせまる

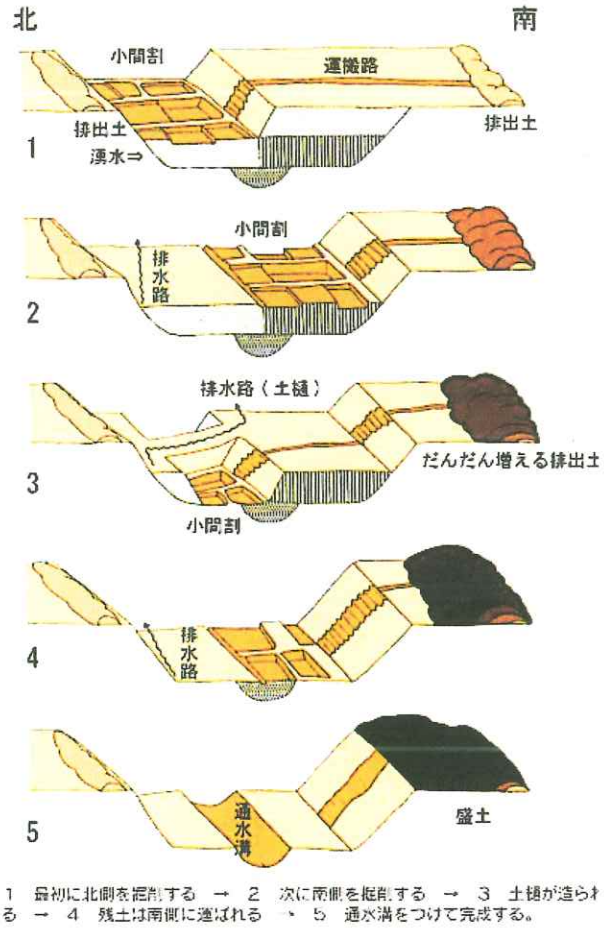
女堀がつくられる 200 年前程前、上野国は平将門の乱（935 年～940 年）により大きな被害を受けている。平将門は２回上野国に入っているが、国司藤原尚範はこれにより国府から追放されている。しかし、平将門はその後、平貞盛、藤原秀郷連合軍に射たれ、支配は終わる。戦乱の舞台となった

上野国の被害は大きく、２年間調雑用といった税が免除されている。ところが、その後も秩序は回復せず、疲弊する時代が長く続き、1095 年にも上野国は１年間調雑用を免除されている[iii]。そこへ襲いかかったのが 1108 年の浅間山の大噴火だった。現在の暦で９月５日という米の収穫にとって大事な時期に噴火したため、災害が食糧危機につながったことが想像できる。水田は水が豊富な所はすぐに復旧されたが、そうでない所は放棄されることになった。さらに追い討ちをかけるように 1128 年にも浅間山は大噴火を起こしていて、困窮が深まっていた。そこで立ち上がったのが、現在の伊勢崎市にあった淵名荘の荘園領主淵名氏や同じ藤原秀郷の流れをくむ荘園領主だったのではないかと考えられている。

では、用水路は本当に有効なのか。桃ノ木川と藤沢川の合流点付近（前橋市上泉町）から取水し、伊勢崎市田部井町までの約 13km を標高 95mの等高線に沿うように堀はつくられている。現在確認できる堀は下の分布図に示したものだけになっているが、昭和の圃場整備以前は、もっと多くの場所で確認できたという。この間には荒砥川や神沢川が流れているが、比較的規模が小さく、大規模な用水路が必要だったことが分かる。

女堀の分布図（Google マップ 2021.8 に筆者による加筆）

現在、この地域の周辺の赤城山南麓には３つの大きな用水路が存在する。１つめは 1970 年に完成した群馬用水で、利根川から取水し、標高２８０mに沿ってみどり市の早川貯水池までの全長約 33ｋｍ、２つ目は 1943 年に完成した大正用水で、同じく利根川から取水し、標高 130mに沿って伊勢崎市の早川までの全長約 24ｋｍ、３つ目は 1706 年に完成した八坂用水で、桃ノ木川から取水し、標高８０mに沿って伊勢崎市の粕川までの全長約 15ｋｍだ。分布図からも分かる通り、この一帯には現在多くの水田が広がっていて、用水路が重要な役割を果たしていることが分かる。



１　最初に北側を掘削する　→　２　次に南側を掘削する　→　３　土樋が造られる　→　４　残土は南側に運ばれる　→　５　通水溝をつけて完成する。

「史跡　女堀」前橋市教育委員会事務局文化財保護課より

次にどうやってつくったのか考えてみたい。写真からも分かる通り、堀は大規模で、分布図に示した現在残っている部分だけでも、大型の前方後円墳を超える規模の工事が行われたことが実際に現地に行ってみて分かった。昭和 54 年から５年にわたって行われた発掘調査により、建設当時のかなり詳しい情報が得られた。それによると、堀はいくつかの工区に分けて工事されていて、いくつかの集団に分かれて作業が行われていた。１段目の掘削で出た土は南側に置かれ、２、３段目からは北側半分を掘削し、次に南側半分を掘削する方法がとられた。これは、北側で出る湧水を排水しながら作業を行う必要があったためと考えられている。重機やポンプのない時代に、手作業でここまでの工事を行うことがいかに大変だったか、容易に想像できる。それと同時に、ここまでの作業を行わなければならなかった当時の人々の必死な思いが伝わってきた。

最後に、なぜ未完だったのか。勾配が足りないなどの設計ミスがあったからではないかとか、工事を協力して行なっていた荘園領主たちが不仲になっ

たからではないかとか、朝廷による荘園への取締りが強化されたためではないかなど諸説あるが、はっきりとした定説は未だない。そこで、私の説を紹介したい。

④　湧水利用及び環境適応説

あまが池（伊勢崎市上田町）

伊勢崎市書上浄水場

大室公園民家園（移築された養蚕農家）

掘削工事が湧水に悩まされたことは発掘調査の結果から分かっている。水がないので遠くから引こうと思って工事をしていたら、工事現場から水が湧いてきて、堀の完成を待たずに目的が達成されたということだ。赤城南麓には湧水が湧く所がたくさんある。あまが池は特に有名で、縄文時代から枯れることのない池と伝えられている。以前はこのような湧水によってできた池がもっとたくさんあったそうだ。現在、近くには伊勢崎市の書上浄水場やあずま浄水場があり、そこで汲み上げられた井戸水を市民に送っている。また、分布図の中に今井沼や飯土井沼のような大きな沼が見られるが、湧水やため池の利用は、近世以降の用水路完成前からこの地域では盛んに行われていたと考えられる。もちろん、用水路をつくった方がより効果的だったのは間違いないが、重労働の見合う効果がないと人々が感じてしまい、女堀の工事は中断されてしまったのではないか。中断している間に、風雨で浅間山のテフラが流され、水田が徐々に復旧できたことも予想できる。また、桑などの水はけがよい土地を好む作物がつくられるようになり、米づくりのみに頼らなくてもよくなったのではないか。つまり、新しい環境に適応できたことも考えられる。実際にこの地域には大室公園にあるような養蚕農家の特徴を持つ古民家が今でも多く見られる。さらに、時間の経過とともに淵名氏の地域での影響力も弱まり、工事は永遠に再開されなくなったというのが、現在のところの私の結論だ。

4．他にもたくさんある災害復興の跡

① 天明泥流

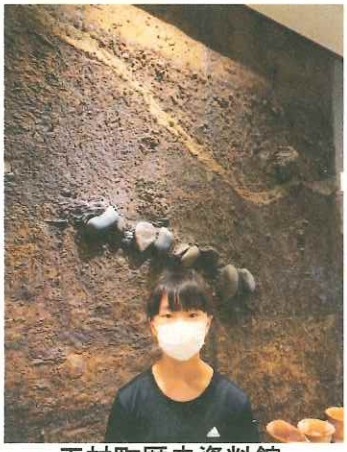
浅間山の火口付近の様子

鎌原観音堂

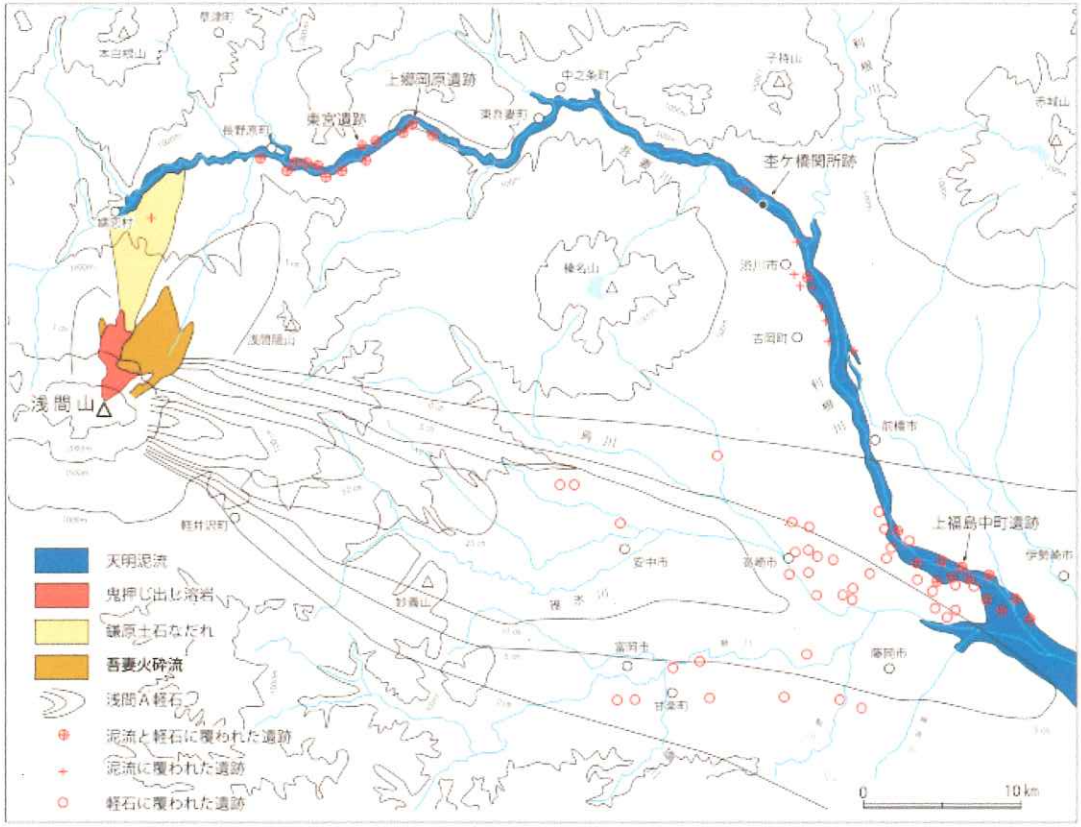
1783 年（天明３年）の浅間山の大噴火は世界の気候を変えてしまうほど大きなもので、飢饉とも重なったため、当時幕府の実権を握っていた田沼意次の失脚につながるなど、政治的にも大きな影響を与えた。この時発生した土石なだれで埋まった鎌原観音堂の石段は、災害の恐ろしさを現在に伝えている。この時鎌原村では住民の約８割にあたる 477 名が犠牲になった。大災害の爪痕は大きかったが、生き残った人々は村の復興を諦めなかった。生き残った人同士で家柄や身分の差を取り払って家族を再編し、村を見事に再生させた[iv]。

やんば天明泥流ミュージアム

土石なだれは吾妻川に入り利根川に達し、泥流となって流域の村々を襲いながら銚子まで達し、被害は 140 村、犠牲者 1500 人に及んだ。鎌原村から 20ｋｍほど下流にある川原畑村（長野原町）では、泥流による大きな被害を受けている。やんば天明泥流ミュージアムではこの時の様子を生々しく体験することができる。特に天明泥流体験シアターでは、当時の村人たちの目線で押し寄せてくる泥流の恐怖を実感できる。印象的だったのは、泥流が津波のように猛スピードで襲ってくるのではなく、じわじわと水位を上げながら家を飲み込んでいくことだ。だから、生活用具はあまり流されることなく、避難を始めた時に近い状態で発掘されている。漆塗りの豪華な御膳などが見つかっており、この村の生活水準の高さには驚かされる。21 軒が被災し、犠牲者４名を出し、年貢が７分の１にまで減り、被災前の半分の水準に回復するのに 15 年もかかっている。火山灰を除去してできた灰塚が各地に見られ、復興に大変な労力を費やしたことが分かる。


玉村町歴史資料館

川原畑村から60ｋｍほど下流の利根川左岸にある玉村町上福島中町遺跡は、１～２ｍの泥流が覆った遺跡だ。上福島村では49軒が被災し、犠牲者１名を出した。玉村町歴史資料館には、同じ泥流で覆われた前方後円墳に関する展示があり、泥流の凄まじさを今に伝えている。興味深いのは、江戸時代の人々が古墳を壊さないように畑を作っていたことだ。私の家の近くには長持形石棺で有名なお富士山古墳があるが、残念ながら両毛線の線路により切断されてしまっていて、対照的に思えた。田畑を覆う火山灰や泥流を埋めるための復旧溝（前橋市田口上田尻遺跡など）が県内各地で見られ、災害に負けないたくましい人たちによる努力の証を今に伝えている。



天明三年浅間山噴火に伴う罹災遺跡（『自然災害と考古学』より転載、一部修正）
群馬県埋蔵文化財調査事業団「遺跡に学ぶ　第38号」より

②　古墳時代に上毛野国を襲った榛名山の噴火

東国文化の中心地として栄えていたこの時代は榛名山の活動が盛んだった。榛名有馬火山灰（５世紀）、榛名二ッ岳渋川テフラ（６世紀初頭）、榛名二ッ岳伊香保テフラ（６世紀中葉）などが確認されている。鎧を着た古墳人で有名な金井東裏遺跡や軽石に埋もれた村として知られる黒井峯遺

周辺に広がる蒟蒻畑

跡など、重要な遺跡には榛名山の噴火が関わっている。火山災害の衝撃については、榛名山の北東麓に積もった２ｍを超える軽石層などから容易に想像できる。噴火の影響で米づくりができない不毛の地になってしまったことは、長期にわたって人々を大いに苦しめたに違いない。しかし、今ではこの地域は日本、いや世界を代表する蒟蒻芋の生産地になっている[v]。蒟蒻芋は過湿も乾燥も苦手とするデリケートな作物で、軽石混じりのこの辺りの土が栽培に適していて、品種改良を繰り返しながら生産性を高めてきた。悪条件でも、見方を変え、努力や工夫をすれば好条件になるということを学んだ。

５．おわりに

日本列島に住む以上、災害から完全に逃れることはほぼ不可能だが、群馬県は安全だと思っている県民は多い。しかし、安心するのは早い。現在の日本では、火山の被害は小さいが、これは単に天明３年級の噴火が 238 年間起こってないからにすぎない。浅間山などがかつてのような大噴火を起こせば、利根川水系に人口が集中する群馬県は、火山灰や土石流により大きな被害を受けることになるだろう。だからこそ、先人たちがどのように被災し、復興してきたのかを理解し、いざという時に備えておくことが大事だ。天明３年の噴火に関する当時の記録が多く残されているのは、江戸時代の人々がこの教訓を後世に伝えたかったためではないかと言われている。

『上毛かるた』取り札「ら」

『上毛かるた』の取り札「ら」は、群馬県の厳しい自然環境とその中で生まれた義理と人情を大切にする県民性を表している。村人たちで協力しながら何世代にもわたって火山灰をどかし、堀や溝を掘った先人たちの姿を振り返りつつ、この県民性をこれからも大切にしていきたい。今回は私が住む伊勢崎市周辺の調査が中心となったが、予想以上の収穫で、範囲を広げることができなかった。今後、より広い範囲の調査を行えたらと思う。

【参考文献】※　本文中で紹介したものを除く

[i] （財）群馬地域文化振興会『新世紀　ぐんま郷土史辞典』群馬県文化事業振興会、2003 年

[ii] 早川由紀夫人・中島秀子「史料に書かれた浅間山の噴火と災害」『火 山 第 43 巻第 4 号』1998 年

[iii] 西垣晴次、山本隆志、丑木幸雄『群馬の歴史』山川出版、1997 年

[iv] 村井　勇『浅間山−天仁・天明の大噴火−』浅間火山博物館、2017 年

[v] 小林香穂「「日本のポンペイ 」群馬の魅力祭発見～本場ポンペイをも凌ぐタイムカプセルの数々～」東国文化自由研究レポート、2020 年